

## 【活動報告】

東京都公文書館・公益財団法人特別区協議会連携事業 パネル展

### 「江戸・東京の橋

### ～水の都をつなぎ、水辺の文化をつむぐ～」

東京都公文書館 史料編さん担当

小粥 祐子

#### 1 開催の趣旨

当館ではここ数年、公益財団法人特別区協議会と連携していくつかの事業を行っている。今年度は、セミナー「公文書を守り、伝え、活かす ～地方公共団体の取り組みと課題」とパネル展「江戸・東京の橋 ～水の都をつなぎ、水辺の文化をつむぐ～」2つの事業を行った。このうち、本稿では後者のパネル展について報告する。今回のパネル展は、東京都建設局協力のもと、平成28年（2016）12月2日（金）から27日（火）までの間、東京区政会館1階エントランスホール（千代田区飯田橋三町目5番1号）において開催された。

本展示の趣旨を企画案より以下に引用する。

江戸・東京という巨大都市は、隅田川等の自然河川の他、江戸城の内堀・外堀や、縦横に張り巡らされた運河に囲まれ、水の都の様相を示してきました。

そこに架けられた多くの橋々は、人と物の交通や流通を支える貴重なインフラであるとともに、豊かな都市景観を形作り、さらに水辺の文化を育む貴重な空間をも生み出してきたのです。

このパネル展では、江戸時代から明治・大正期、そして関東大震災後の復興橋梁に至る江戸・東京の橋を取り上げ、それぞれの時代の技術や意匠、名所としての橋が生み出した文化空間のあり方をたどっていきます。

戦後、多くの河川や運河がかつての機能を後退させ、高度な土木技術とすぐれたデザインを誇っていた橋々も画一的なものへと流れていきました。しかし、近年改めて東京の都市構造の核をなしている水の都の歴史性を再発見し、歴史的景観の整備、水辺の文化の再生と地域の活性化に活かそうとするさまざまな取り組みが開始されています。

このパネル展を通して「橋のある風景」の意義を考え直すきっかけとさせていただければ幸いです。

東京都公文書館・公益財団法人特別区協議会連携事業  
パネル展  
江戸・東京の橋  
～水の都をつなぎ、水辺の文化をつむぐ～  
期間：平成28年12月2日（金）～27日（火）

東京都公文書館・特別区協議会では、江戸・東京の橋梁の歴史について、地図・写真・資料等で紹介するパネル展を開催します。この機会にぜひご覧ください。

駅名	路線名	出口	所要時間
飯田橋	東京メトロ東西線	A5出口	徒歩約2分
	東京メトロ有楽町線 東京メトロ丸の内線 都営地下鉄大江戸線	A2出口	徒歩約5分
JR中央線・総武線	東口	徒歩約5分	

※ 会場へお越しの際は、公共の交通機関をご利用いただきませうようお願い申し上げます。

図1 案内チラシ

## 2 展示の構成

本展示の構成は、以下の5部構成である。

- I 江戸の橋 ～そのすがたとかたち
- II 江戸から東京へ ～名所としての橋々
- III 架け替えられていく橋 ～明治・大正期の新たな意匠
- IV 関東大震災と復興橋梁
- V 重要文化財に指定された勝鬨橋

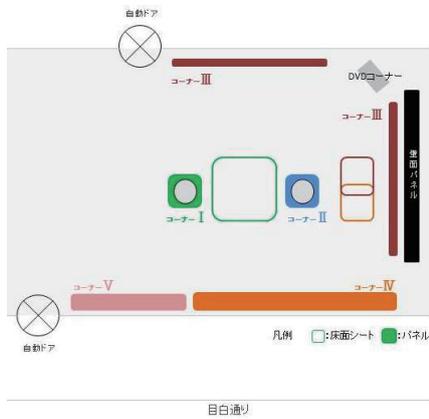


図2 会場レイアウト



写真1 会場風景

このうち、I・IIの展示パネルは当館が作成、III・IV・Vの展示パネルは建設局が毎年秋に行っている「東京の橋パネル展」「東京 橋と土木展」などのために作成されたものを借用し、当館が構成を再編成した。

また、パネルのほかに、壁面には「吾妻橋」「両国橋」の錦絵と「永代橋」「清洲橋」の絵葉書の画像を拡大印刷して飾った。床面には本展示で取り上げた特徴ある史資料3点を粘着シートに印刷し貼った（以下、床貼りと記す。詳しくは、後述を参照）。さらに、エントランスホールの映像コーナーでは建設局によって作成された「勝鬨橋」のDVDを上映した。

会場である東京区政会館は目白通り沿いにあり、2面が通りに面している。会館が通りに面する所は全面ガラス張りになっていて、ガラス面には本展示を知らせるための横長ポスターを貼った。

各コーナーの概要と、今回の展示に用いた特徴ある史資料を以下に記す。

### I 江戸の橋 ～そのすがたとかたち

江戸という都市は、江戸内海（東京湾）、隅田川、江戸城を中心に「の」の字形に展開する内堀・外堀、神田川や音無川などの中小河川、そして都市内部に張り巡らされた運河などが織りなす水の都であった。当然そこには数多くの橋が架けられ、交通・流通を支えるとともに独特な景観美を生み出した。そこで、本コーナーでは、大都市・江戸を俯瞰的に描いた絵画資料から「江戸の橋」を取り上げ、橋の都・江戸の様相が形成される過程を浮かびあがらせた。

『武州豊島郡江戸庄図』（当館蔵）には、寛永9年（1632）12月時点の



図3 『武州豊島郡江戸庄図』プロット図

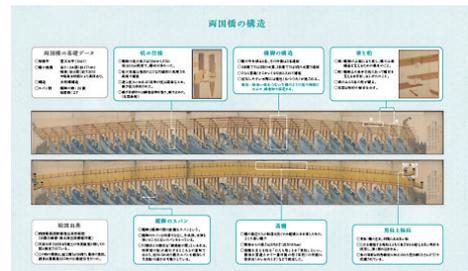


図4 パネル「両国橋の構造」

江戸の町に架けられた橋が示されている。展示では同図の上に、主要な橋名をプロットしパネルで解説するとともに、来場者により詳しく見ていただけるようパネルよりも拡大して床貼りとした（図3、写真2）。さらに、本コーナーでは橋の構造や工事の様子が明らかとなる絵画資料、図面を取り上げた。このうち、橋の構造をよりわかり易く解説するために『両国橋掛直御修復出来形絵図』（国立国会図書館蔵）をパネルと床面とに示した。特に床貼りのものはエントランスホール中央にたつ2本の柱と柱との間を渡せる大きさまで拡大した。（図4、写真2）



写真2 「江戸の橋」コーナー床貼りの様子

## II 江戸から東京へ ～名所としての橋々

江戸の橋の多くは、都市インフラとしての機能を果たすだけでなく、橋からの眺望を楽しみ、橋それ自体の作り出す景観を愛でる名所となっていた。延焼防止のために設置された橋詰めの広小路には、さまざまな商品を扱う床店よしずや葎簀張の茶屋、土弓場どきゅうばのような遊興施設が建ち並んだ。また、芝居や見世物などの興行も大規模な葎簀張を設置して行われた。本コーナーでは名所を描いた絵画資料から「橋」のある風景を取り上げた。



図5 『江戸名所図会』に描かれた橋

まず、江戸の名所を描いた版本として有名な『江戸名所図会』（当館蔵）を用いて、先述した橋詰めの広小路を中心に描かれる江戸の人々の日常生活、神田上水から水を引くための水道橋、諸国と江戸との流通を支えた廻船（貨物船）を通すための木製アーチ橋など、インフラとして整備された橋が名所となっていく様子を示した。次に、一つの橋に着目して幾つかの絵画資料を編年にすることによって、時代の移り変わりによる変容を辿った。その例として、両国橋を取り上げた。取り上げた絵画資料は、江戸時代の『江戸名所図会』（当館蔵）と明治時代の錦絵『東京名所之内両国橋大花火之真図』（当館蔵）である。この2枚の絵画資料を見比べると、どちらも両国橋のたもとが盛り場である点において場所としての連続性はあるものの、橋そのものは明治期に洋式木橋へと架け替えられ、橋詰の管理は民間から官へ変わるなど、時代の移り変わりとともに橋を取り巻く環境が変容していく様子がわかる。

他方、時代の移り変わりにより橋が架け替えられるだけでなく、橋の名称そのものも変わることがある。その例として皇居

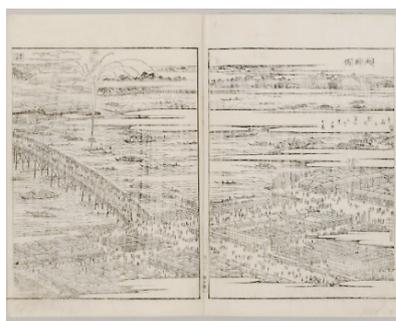


図6 「両国橋」『江戸名所図会』



図7 『東京名所之内両国橋大花火之真図』

「二重橋」を取り上げた。現在、皇居前広場と皇居正門とを繋ぐ2本の橋は、皇居前広場と並行して手前に石橋、奥に鉄橋が架けられているが、「二重橋」は鉄橋のことを指す。しかし、昭和初期の絵葉書『(大東京) 莊嚴極まる二重橋』(当館蔵)をみると、「二重橋」は手前の石橋を指している。そもそも「二重橋」という名称は、皇居が江戸城西丸であった時代、「西丸下乗橋」の橋桁が二重になっていることから名づけられた。「西丸下乗橋」は、明治21年(1888)に鉄橋へ架け替えられた。

### Ⅲ 架け替えられていく橋 ～明治・大正期の新たな意匠

江戸から明治に変わると、多様な材料と工法によって新しいデザインの橋が生まれた。例えば、肥後の石工集団による石造アーチ橋、方杖状の橋脚を採用した洋式木橋、新しい技術による鉄橋などである。また、東京市区改正期以降、都市景観に配慮した装飾的な橋が多く見られるようになった。橋のデザインは、アール・デコ、ゴシック、ネオバロックなど欧米の様式が採用されることが多かった。本コーナーでは、明治・大正時代に工事記録として残された写真を用いて、当時の新しい技術・新しいデザインによって架け替えられた橋を紹介した。また、東京市区改正期の装飾的な橋と次コーナーで取り上げた震災復興期の橋については、大正期に出版された『建築写真類聚 橋梁』(洪洋社)の巻1と巻2に掲載されている写真から16点を選び出し、「写された近代橋梁の意匠」と題して1シートにレイアウトして床貼りした(写真3)。本コーナーとして取り上げた橋は、四谷見付(附)橋、昌平橋、新大橋、一石橋、日本橋、霊岸(厳)橋、弾正橋、三原橋、万年橋、八ツ山橋である。

### Ⅳ 関東大震災と復興橋梁

大正12年(1923)9月1日に関東大震災が発生した。東京市内に架かる橋は倒壊することはなかったものの、木橋であったために多くの橋が焼失した。被害を受けた橋は復興のために新しい土木技術によって架け替えられた。関東大震災後に架け替えられた橋を復興橋梁という。復興橋梁のデザインは、東京市区改正期以降の橋と同様に様々な欧米の装飾様式が採用された。この復興橋梁についても、先述の『建築写真類聚 橋梁』(洪洋社)に幾つか収められている。そこで、同写真集から幾つかの橋を取り上げ、先述の「写された近代橋梁の意匠」床貼りシートにまとめ展示した(図8)。

本コーナーでは、当時、隅田川に架け替えられた10基の橋のうち、永代橋・清州橋・聖橋を取り上げ、工事記録写真によって解説されたパネルを用い、これらの橋を架けるために



写真3「写された近代橋梁の意匠」床貼りの様子



図8「写された近代橋梁の意匠」の橋位置図



写真4「関東大震災と復興橋梁」パネル 建設局作成

用いられた技術を紹介した（写真4）。それぞれの橋は、永代橋の鋼ソリッド・リブ・パラレスト・タイドアーチ橋、清洲橋の鋼自碇式チェーン吊橋、聖橋の鉄骨コンクリートアーチ橋という構法で造られた。

### V 重要文化財に指定された勝鬨橋

現在、隅田川には18基の橋が架かっている。この中で、勝鬨橋・永代橋・清洲橋の3つの橋が、平成19年（2007）6月に国の重要文化財に指定されたが、本コーナーでは勝鬨橋を取り上げた。勝鬨橋は道路可動橋あるいは跳開橋と呼ばれる構造を持つ橋である。船舶が橋の下を通過する際に中央部が跳ね上がる海運と陸運の共栄を意図した特殊な構造形式で、シカゴ型二葉式跳開橋と呼ばれ、国内最大の可動支間を有する大規模かつ技術的完成度の高い構造物である。勝鬨橋は、東京市嘱託員・成瀬勝武らの設計に基づいて、昭和15年（1940）6月に完成した。



写真5 「勝鬨橋」DVDコーナー

本コーナーでは、勝鬨橋が生まれた背景と勝鬨橋が竣工してから開かずの橋となるまでの経緯について写真を用い、その移り変わりを辿った。また、DVDコーナーでは、建設局が作成した「勝鬨橋」の記録映像を流した（写真5）。記録映像では、勝鬨橋が施工されてから竣工し勝鬨橋が跳ね上がるまでの様子が順を追って収められている。

### 3 関連する講演会

本展示開催中の12月16日（金）午後、本展示に関連する講演会が東京区政会館20階会議室において行われた。講師は、建設局道路管理部橋梁構造専門課長・紅林章央氏と江戸東京博物館名誉館長・竹内誠氏である。本講演会は、受講申し込み期間を過ぎても申込み希望が後を絶たなかったため申込期間を延長する程の人気講演会となり、当日の受講者数は94人にもおよんだ。

紅林氏は「東京の橋 明治から震災復興まで」と題し、パワーポイントを用いて沢山の画像資料を紹介しながら橋の魅力語るものであった。内容は、橋の構造からデザイン、最新の構法に至るまで多岐にわたっていた。特に、明治から昭和までの橋梁設計者について熱く語られる姿は、現在、東京の橋梁を設計するプロフェッショナルとしての、先達への敬意の表現のように感じた。



写真6 紅林章央氏

竹内氏は「両国橋と江戸文化」と題し、レジュメに挙げられた資料を元に、軽妙な語り口でご自身の川遊び体験から江戸の川と橋、特に両国橋とその周辺で繰り広げられる生業や文化活動についてユーモアを交えながら語られた。レジュメには、明治44年（1911）以来、現在でも当館が編纂している『東京市史稿』の「橋梁篇第二」から、寛保2年（1742）に両国橋が大破し掛け替え工事を行っている最中に、隅田川を渡船で往来した人数を表に示して掲げられていた。



写真7 竹内 誠氏

講演会のアンケート結果、受講者のうち99%から「講座の内容は興味をもてるものであった」と回答が得られ有意義な講演会となった。

#### 4 広報活動について

本展示の広報は、チラシ（図1）、当館公式HP及びSNS（Facebook・Twitter）、新宿駅西口のデジタルサイネージにより行った。

当館のSNSは、週2～3回程度記事を掲載しているが、本展示の宣伝に関しては、展示期間中5回掲載した（12月2、5、7、16、21日）。

デジタルサイネージについては、新宿駅西口地下広場に設置された大型デジタルサイネージと4号街路デジタルサイネージ（柱面に設置された小型のデジタルサイネージ）に3パターンの広報画像を掲載した（写真8）。当館は、これまでもデジタルサイネージによる広報を試みているが、3パターンの広報画像を掲載したのは初めてである。デジタルサイネージは、通行者数が多い新宿駅西口という場所柄、多くの人の目に留まりやすく、今後も有益な広報媒体として活用できるであろう。

#### 5 総括

本展示では、水の都である江戸・東京に架けられた「橋」について、江戸・明治・大正・昭和と時代を追っていくことにより、それぞれの時代の技術や意匠、名所としての橋が生み出した文化空間のあり方を絵画資料や写真などからたどった。

橋は土木技術によって設計され施工されることから、これらの事柄を説明しようとする時、土木の専門用語が多用される。しかし、橋の構造や施工手順などを一般的に理解するには、言葉よりも視覚情報から入る方が理解しやすいこともあるだろう。こうしたことから、本展示の多種多様な絵画資料や記録写真はその機会を提供することができたといえよう。

また、今回は、パネル展示という方法によって、単に橋に関する絵画資料や写真を見せるだけでなく、橋にまつわる歴史や物語、橋を対象に描かれた絵に込められた想いを文章で表すことにより、来場者へ新たな関心を誘う機会も提供することができた。

その一方、今後の課題もある。当館の認知度を高めるという点において、通常、当館の展示コーナーで行っている常設展示や企画展示とは異なり、館を離れ他機関と連携・共催して展示を行うことは非常に有意義である。ただ、今回の展示は、当館の職員が展示会場に常駐するわけにはいかず、来場者の反応を間近に知ることが出来なかった。これまでに当館が他機関と行ってきた展示では、会場においてアンケートコーナーを設けることもあったが、今回は展示会場がオープンスペースであったためアンケートの実施を見送った。今回のような場合、来場者の反応をどのように汲み取るか改善が必要である。



写真8 新宿駅西口のデジタルサイネージ

展示パネルリスト

	パネル名	掲載史資料所蔵機関名・請求番号等
	ごあいさつ	
<b>I</b>	<b>江戸の橋 そのすがたとかたち</b>	
	CC 江戸の橋—そのすがたとかたち	東京都立中央図書館 東京誌料025-S1
	江戸城の建設と橋の整備	国立歴史民俗博物館 識別番号H-5
	寛永年間 日本橋の賑わい	同上
	城下町江戸の原型と橋々	東京都公文書館 請求番号654-05-01-09
	本所・深川の開発と橋々	東京都立中央図書館 東京誌料047-3
	江戸時代の橋の構造	国立国会図書館 2-113
	両国橋の構造	国立国会図書館 寄別8-2-1-3
	橋脚を打ち込む一震込み工法	首都大学東京図書館 水野家文書D1-41
	北への玄関口 日光街道千住大橋	荒川ふるさと文化館
	千住大橋 祭りの場としての橋	東京都公文書館 請求番号CI-213
	橋と伝説 千住大橋は流されない！	荒川ふるさと文化館
<b>II</b>	<b>江戸から東京へ 一名所としての橋々</b>	
	CC 江戸から東京へ一名所としての橋々	国立国会図書館 寄別2-9-1-4
	両国橋と広小路の賑わい	東京都公文書館 請求番号CI-160
	連続と変容 一 開化期の両国橋と花火	同上
	江戸名所図会に描かれた橋	
	江戸の石造アーチ橋 目黒太鼓橋	①東京都公文書館 請求番号CI-165 ②国立国会図書館 寄別1-8-2-1
	お茶の水 神田上水懸橋 水道橋	①東京都公文書館 請求番号CI-159 ②国立国会図書館 寄別1-9-1-8
	八つ見橋—石橋からの眺望	①東京都公文書館 請求番号CI-159 ②国立国会図書館 寄別7-3-2-1
	将軍上洛は日本橋から？	東京都公文書館
	鉄橋となった吾妻橋と水雷火	同上
	皇城の整備と橋	①東京都公文書館 請求番号こ81 ②「東京市史稿」皇城篇より
	皇居正門の橋と「二重橋」	東京都立中央図書館 識別番号6171-70
	皇居正門石橋・鉄橋の装飾電燈	東京都公文書館 絵葉書コレクション
<b>III</b>	<b>明治・大正、東京の橋の新展開</b>	
	CC 明治・大正、東京の橋の新展開	東京都公文書館 請求番号611.87.03
	東京の石造アーチ橋	東京都建設局作成
	東京の石造アーチ橋 設計図面	同上
	明治初期の洋式木橋の導入	同上
	明治東京の鉄橋 旧弾正橋(現八幡橋)	同上
	明治時代末の隅田川の鉄橋	同上
	隅田川の鉄橋 吾妻橋	同上
	隅田川の鉄橋 両国橋	同上
	両国橋 → 南高橋	同上
	明治大正時代の橋梁のデザイン	同上
	日本橋	同上
	日本橋の建設	同上
<b>IV</b>	<b>関東大震災と復興橋梁</b>	
	CC 関東大震災と復興橋梁	東京都公文書館 請求番号 震災・災害-平置11
	関東大震災による隅田川橋梁の被災	東京都建設局作成
	関東大震災隅田川橋梁の事業主体	同上
	橋梁復興事業	同上
	永代橋 鋼ソリッドリブ・バランス・タイドアーチ橋	同上
	永代橋 施工風景写真	同上
	新技術の導入(ニューマチックケーソン工法)	同上
	清洲橋 鋼自碇式チェーン吊橋	同上
	清洲橋 施工風景写真	同上
	聖橋 鉄骨コンクリートアーチ橋	同上
<b>V</b>	<b>幻の万博と勝どき橋</b>	
	コーナーキャプション 重要文化財に指定された勝関橋	中央区立京橋図書館 書誌番号001700838
	皇紀2600年と日本万国博覧会計画	東京都公文書館 請求番号UZ-G4-122
	勝どき橋を都電が走る	中央区立京橋図書館 書誌番号001700844
	跳開橋の終焉	中央区立京橋図書館 書誌番号001927308
	<b>番外 床面パネル、壁面パネル</b>	
	壁面 橋梁コラージュ	
	床面① 寛永年間の橋々	
	床面② 両国橋の構造	
	床面③ 写された近代橋梁の意匠	

※本報告書の著作権は東京都にあります。「私的使用のための複製」や「引用」など著作権法上認められた場合を除き、無断で複製・転用することはできません。